

## 横穴式石室の平面形について

岡野慶隆

古墳時代後期という時期区分が、古墳の規模縮小化とともに築造量の増加及び群集化の傾向によるものであることは一般に認められている。そしてそれと並んであげられるのは、古墳の主体部としてもっぱら横穴式石室が構築されていることである。近年の発掘調査の増加は後期古墳とともにその主体部である横穴式石室に関する多くの資料を提供してきた。ここではこの横穴式石室を再検討する意味で、特にその平面形について若干の問題提起を試みてみたい。

さて我々が横穴式石室を観察する時、いくつかの要点に分けて見ることになる。たとえばそれは石室の平面形、立面形及びその規模や石材の種類と使用法、石材の加工法、石室内の施設等の点についてである。そしてこれらの要点をもとに石室の形態分類を行ない、構築技術、地域差、築造時期等を知ることができ、さらには被葬者の地位、葬送に関する思想等についても推定することができる。

しかしここで注意せねばならぬのは、これらの作業の対象があくまでも石材により構築された人為的産物である点である。すなわち横穴式石室の構築にあたっては、石室形態の決定と企画、構築技術、さらには労働力等の前提条件が当然考えられるのである。中でも石室構築前の企画と構築技術については、現在見る石室形態を決定づけたものとして重視しなければならないであろう。又逆にこのような何らかの当初の企画が復元されるならば、それぞれの横穴式石室の比較が可能となり、さらには構築技術の系統や被葬者の地位についても論ずることができるであろう。

実際このような点については従来よりしばしば指摘されてきており、こういった視点からの横穴式石室研究が後期古墳、或いは古墳時代後期を知る上において果す役割は大きなものであるに違いない。<sup>①</sup>しかし終末期の切石古墳ではなく最も多く存在する自然石を積上げた石室を現実に対象とした時、このような方法が容易に行ないえないことに気がつく。なぜならとえ当初の企画が存在したとしても、現実には築造しようとする地点の地形や確保し得る石材及び労働力等によってさまざまな誤差や変更が生じることが十分考えられるからである。

ところがこのように当然生じると思われる誤差や変更にもかかわらず、比較的当初の企画に近い可能性があるのは横穴式石室の平面形である。なぜなら横穴式石室構築においてまず行なわれるのは壁面の基底部となる石材の配置であり、この作業の後に積み上げられる側壁及び天井石については誤差や変更が生じる可能性が強いからである。もちろんこの平面形においても実際に石材を配置する時にいくらかの誤差を生じることも十分考えられるが、このように石室構築の最初の作業であることを考えれば、最も当初の企画を反映するもの見てさしつかえないのではなかろうか。従来よりこの横穴式石室の平面形については石室の形態を端的に示すものとして扱われてきており、白石太一郎氏により玄室幅指数、羨道幅指数をもと

にした形態分類及び編年作業も行なわれている<sup>②</sup>。しかしここで言う平面形の企画とはいかにして平面形とその規模が決定されたかということであり、白石氏の形態分類とは別のものである。

ところでこの横穴式石室の平面形企画の復元についてはすでに先学による試みを見ることができる。たとえば尾崎喜左雄氏は正方形等を基準にした玄室部の平面企画を復元され、さらにそこにおいて使用された尺を考えるまでに至っている<sup>③</sup>。又近年では岡本一士氏が玄室の四隅を結ぶ対角線をもとにして得られる円の半径を基準とした平面企画法を提唱され、その基準が羨道長や石室高等も規制することを試みられている<sup>④</sup>。しかしこのような両氏の試みにもかかわらず、横穴式石室の企画復元やそれによる構築技術の系統について積極的に論じられることはなかった。

ここではあえてこのような大きな問題について論ずるつもりはないが、若干の具体例より今述べてきたことについての可能性の一端でも窺いたいと考えている。ここで検討を行なうのは西摂地方でも六甲東麓に位置する西宮市上ヶ原関西学院構内古墳と宝塚市仁川旭ヶ丘古墳群2号墳で、両古墳は仁川流域に群集する後期古墳群内に立地している。(第1図)

#### 関西学院構内古墳 (第2図)

関西学院構内古墳はもと上ヶ原台地北端の仁川に傾斜する斜面あたりに群集していた上ヶ原古墳群中に入るものの、径約18mの円形の封土をもち、南々西に開口する右片袖式の横穴式石室が設けられている。この古墳は昭和34年に発掘調査され、須恵器、馬具、玉類、金環等が検出されているが、その出土遺物より築造時期は6世紀後半と考えられている<sup>⑤</sup>。



第1図 関西学院構内古墳と仁川旭ヶ丘古墳群2号墳の位置

石室は羨道部の側壁及び天井石の一部が欠けている以外はほぼ旧状を保っているものと思われるが、狭長な玄室の平面形に加えて側壁上半部が花崗岩の比較的小さな石材を用いてもち送りをしている点が特徴である。この石室の平面規模については次のように測ることができた。<sup>⑥</sup>

|     |       |      |       |
|-----|-------|------|-------|
| 玄室長 | 4.86m | 玄室幅奥 | 1.50m |
|     |       | 中    | 1.58m |
|     |       | 前    | 1.66m |
| 羨道長 | 3.1 m | 羨道幅奥 | 1.18m |
|     |       | 前    | 1.36m |

この平面規模でまず気がつくことは、玄室長と羨道長が玄室前幅のほぼ3倍と2倍にあたる点である。もちろん多少の誤差はあるが、各数値がそろって近似するということはけっして偶然ではなく、構築前に企画されたものと見てよいであろう。すなわち玄室長及び羨道長は、玄室前幅が決定された後にそれぞれの3倍、2倍の長さをとることが考えられたと見ることができ、第1図に示すように玄室前幅を一辺とする正方形を5個連続させた平面企画を考えることができる。このように考えたならば、この石室が他にあまり類を見ない狭長な平面形をとることになった理由も理解することができよう。又左側壁の前から4石目と5石目の接点が右側壁の袖部に対応していることからすれば、企画だけでなく構築時にもこの玄室前部が基点となつたのではなかろうか。<sup>⑦</sup>

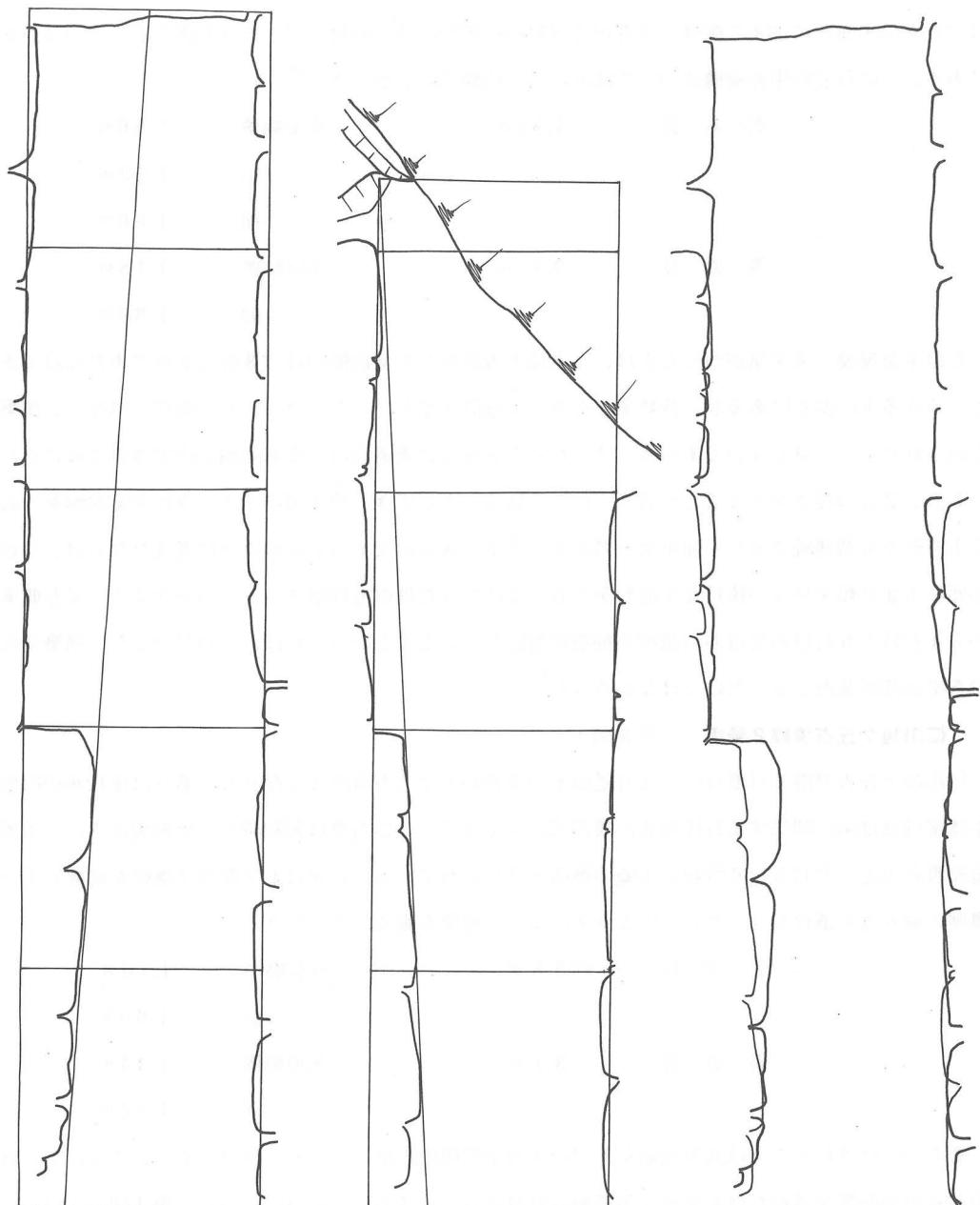
### 仁川旭ヶ丘古墳群2号墳（第3図）

仁川旭ヶ丘古墳群2号墳は仁川北方尾根上の3基からなる古墳群中に存在し、墳丘は径12mの円墳で、主体部はほぼ南に開口する右片袖式の横穴式石室である。この古墳は昭和47年に発掘調査され、須恵器、金環等が出土しており、6世紀の末頃の築造と考えられている。<sup>⑧</sup>石室は上半部及び奥壁が崩壊しているが、奥壁の掘り方が遺存していたことにより次のように規模を測ることができる。

|     |       |      |       |
|-----|-------|------|-------|
| 玄室長 | 約3.8m | 玄室幅中 | 1.70m |
|     |       | 前    | 1.66m |
| 羨道長 | 3.1 m | 羨道幅奥 | 1.44m |
|     |       | 前    | 1.26m |

ここで注目されることは玄室前幅が上記の関西学院構内古墳と一致し、羨道長も近似する点で、試みに両石室の平面形を重ねれば玄室長と羨道幅以外はほぼ一致することに気がつく。（第4図）このことからこの石室の場合でも玄室前幅決定後に羨道長が定められたと考えてよいであろう。又玄室長については玄室前幅の倍数にはならず、この長さがどのように決定されたか知ることはできないが、羨道入口が玄室前側からちょうどその幅の2倍にあたることや、左側壁の前から4石目と5石目の接点が右の袖部に対応することからすれば、やはり玄室前部が当初の企画時及び構築時に一つの基点になったと考えができる。<sup>⑨</sup>

このように両古墳の石室平面企画を復元することができたが、両古墳とも玄室前幅を基本単位並びに基



第2図 関西学院構内古墳

第3図 仁川旭ヶ丘古墳群2号墳

第4図 関西学院構内古墳（太線）  
仁川旭ヶ丘古墳群（細線）



点として他の長さも決定されたことがわかった。特に関西学院構内古墳の場合では玄室長、羨道長がともに玄室前幅の倍数になるという整然とした企画法である。この企画法についてはすでに尾崎喜左雄氏により<sup>⑩</sup>玄室部の企画として復元されているが、ここでは玄室、羨道ともにこの企画法がなされたものも存在する<sup>⑪</sup>ことが知られたのである。又同じく西摂地方でも川西市勝福寺古墳、宝塚市雲雀山西尾根古墳群 B 2 号<sup>⑫</sup>墳等は、玄室長と羨道長がともに玄室幅の 2 倍になっており、当時比較的多く行なわれた企画法であった<sup>⑬</sup>ことがわかる。

又関西学院構内古墳と旭ヶ丘古墳群 2 号墳の比較において注目されることは、平面形が近似することとともに平面形企画の基本単位となった玄室前幅が一致する点で、何らかの共通する尺度を用いた可能性を考えることができる。<sup>⑭</sup>このことは位置的にも仁川をはさんで近接する両古墳間に石室企画における何らかのつながりがあったことを示すとともに、仁川流域に群集する後期古墳群の成立事情を知るうえにおいて一つの手がかりになるのではないかと思われる。

以上のように横穴式石室の平面企画について若干の検討を行なったが、すべての横穴式石室がここで試みたような方法で企画されたわけではない。又ここで見た玄室幅、玄室長、羨道長以外の規模がどのように決定されたかについてはまだ不明な点が多く、多種の企画法が存在していたと考えられる。しかし先にも述べたように横穴式石室構築の事情や石室の相互関係を具体的に解明するためには、今後こういった視点からの研究が積極的に進められるべきであると思われる。

#### 〈註〉

- ① 喜谷美宣「後期古墳時代研究抄史」(『日本考古学の諸問題』 昭和35年)
- 白石太一郎「岩屋山式の横穴式石室について」(『論集終末期古墳』 昭和48年)
- ② 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考—河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として—」(『古代学研究』第 42・43 合併号)
- ③ 尾崎喜左雄「横穴式石室平面図形の企画」(『考古学雑誌』第48巻第 4 号)
- ④ 岡本一士「古墳構築規矩論—その 1 横穴式石室」(『元興寺仏教民俗資料研究所年報』第 8 冊 昭和49年)
- ⑤ 武藤誠「埋蔵文化財調査記録」(『西宮市史』第 7 卷 昭和34年)
- 関西学院大学考古学研究会「仁川流域の後期古墳」(『関西学院考古』第 3 号)
- ⑥ ここに記した計測値は昭和49年に関西学院大学考古学研究会が作成した石室実測図をもとにしたものである。
- ⑦ 羨道部右側壁の平面形は外側に開くが、その方向は一番奥の正方形の辺の中央部からのラインと一致している。おそらくこの平面形もここで示した企画法より決定されたのではないかと思われる。
- ⑧ 仁川旭ヶ丘古墳群調査委員会『仁川旭ヶ丘古墳群調査報告』(昭和47年)

計測値はこの調査で作成された石室実測図によるものである。

⑨ 羨道部右側壁の平面形は羨道入口部で狭くなるが、その方向は奥壁西端からのラインとほぼ一致する。

やはり関西学院構内古墳と同様にこの企画法により決定された平面形ではないかと思われる。又玄室長は玄室前幅の2倍よりも約50cmほど長くなる。奥壁が存在しないため正確な数値は不明であるが、一定の尺度によった可能性も考えられる。

⑩ 注③と同じ

⑪ 亥野彌「古墳時代の遺跡と遺物」(『川西市史』第4巻 昭和51年)

⑫ 宝塚市教育委員会『宝塚市雲雀山古墳群』(昭和50年)

⑬ これ以外に玄室長が玄室幅のはば2倍になる例としては、大阪府池田市鉢塚古墳、奈良県平群町鳥土塚古墳、同ツボリ山古墳、桜井市天王山古墳、同文殊院東古墳等多くの古墳があげられる。しかし玄室長が玄室幅の3倍になる例は、ここにあげた関西学院構内古墳と大阪府東大阪市山畠古墳群35号墳等があげられるが、あまり例を見ない。

⑭ ここで両古墳の平面企画にどのような尺度が用いられたかが問題となるが、一般に1尺が約35.6cmとされる高麗尺によったものでないことは確かである。